

平成25年度 第2回

川合市長と語り合うタウンミーティング

～ 若者の力を生かしたまちの活性化 ～



日時：平成25年7月18日（木）
午後7時00分～8時30分
場所：川越商工会議所 会議室

参加者

川越商工会議所 青年部の方 27名

出席者

市長、奥山副市長、市民部長

意見数

分類	件数	内容	頁
教育・文化・スポーツ	5	小江戸川越マラソン	4
		ツール・ド・フランス・イン・ジャパン	6
		自転車競技場	6
		初雁球場	7
		市立川越高校	8
都市基盤・生活基盤	2	道路整備	2
		渋滞緩和のための施策	2
産業・観光	6	観光の目玉	2
		鶴川座・織物市場の今後	4
		市としての農業への取り組み	9
		冬水田んぼへの市の支援	15
		労働人口を増やすための施策	16
		工場等の誘致と水道・下水道料金	20
環境	2	太陽光発電施設への補助制度	20
		エコタウンプロジェクト	20
地域社会と市民生活	1	危険な建物	7
行財政運営	4	川越市の目指すまちの活性化	3
		若い世代への働きかけ	12
		縦割り行政	14
		日本で初めてのこと	14
計	20		

意見交換（要約）

《道路整備、渋滞緩和のための施策、観光の目玉》

意見 私、自宅が笠幡というところでございまして、まちの中のことというのは、まだ比較的不慣れというか、余りよくわからない部分というのがあるんですが、仕事柄、車でよく市内を移動することが多いんですが、まだまだ何というんでしょう、歩行者のための歩道の整備だとか、道は広がっているんだけど、1カ所、立ち退きが完了していないとかというところももろもろあるんですが。行政のほうで担当者さんが変わると、今までこういう調子でいっていたものが急にまた頓挫するというか、そこでブレーキがかかってしまうようなところの仕組み、こういったものをまず1つ、改善点として何か市のほうとしても検討する部分があれば、速やかな解決方法だとかが見つけていくのかなということ、ちょっとふと感じたものですから、ちょっとその辺のことを1つ提案したいなということがあります。

あとは、観光地のことでいうと、観光の目玉というものを何か、極論で言えばお城をつくっちゃうとか、そういったことにこれから先、何十年かの計画で構わないんだと思うんですけども、初雁城というんですかね、あの辺の整備だとかが進められていければ、我々川越市民としても観光地の目玉というのが何かというところで自慢になるようなところが出ていったらいいなというふうに感じています。

駅のところは、なかなかいろんな部分があるので致し方ないですが、やはりどうしても川越のまちというのは道路が狭いので交通渋滞の緩和等が、やはり観光客の方が、今たまたま元町中華街から川越まで乗り入れの関係とかで6%、7%、約600万人ぐらい観光客の方が増えているということ、では、果たして車とかで来た方の渋滞緩和だとか、そういった部分のことは、もう少し今後検討する部分ではないかなということ、多く感じたところです。

市長 道路の点につきましては、ご指摘のようにこれからいろいろやっていかなければならない改善すべき点は多いという、そういう点は認識しております。まだ拡幅が実現できていない場所があるんですが、もうその状況になってから大分たちますので、やはりこの辺でしっかり事業を進めなければならないというようなことは考えておりまして、きちんと事業を完了させるように、今、職員を激励というか、叱咤しているところがございます。

それから、ほかの渋滞緩和のための施策であるとか、あるいは子どもの通学路の整備がまだまだ進んでいないという、その点についても承知しておりまして、特に通学

路の問題については、今までもそうだったんですが、今年度もさらに力を入れて、できるだけ進めていきたいというふうに考えています。一番街の一方通行の問題は、交通方策検討委員会からの答申をもらってから、もう2年半たってしまうんですが、これも一方通行にするのかどうか、できれば今年度中ぐらいには、はっきりした方向性を出したいというふうに考えています。

一方通行の問題については、やはり地域の皆さんの了解が得られないと、警察はオーケーをしてくれません。本当は2年半前に答申をもらった段階で、大部分の方は一番街を一方通行にしましょうということで賛成してくれていたんですが、答申のあった直後に反対の方が運動を展開された関係で、なかなか公安委員会、警察のほうも一方通行をオーケーだよというようなことを言いにくくなってしまった、そういう面がございまして、今、一番街の周辺地域の人を中心に、いろいろ検討、話し合いを進めているところで、何とか本年度中には一定の結論を出して、実現するのであれば実現する、先送りするのなら先送りする、ほかの方法をとるのであれば、ほかの方法をとるとというようなことをやりたいというふうに考えています。

それと、観光の目玉の点については、富士見櫓、我々は御嶽さんと呼んでいたんですけども、富士見櫓というのは、今、県立川越高校の南側に山がありますよね、木がいっぱい茂った、あそこが昔は富士見櫓という二層建てか、あるいは三層建ての建物があったということ、それを再現しようよという計画はあります。けれども、諸般の事情ですとってきています。あそこの山の上に富士見櫓という建物を、白壁のお城みたいな建物を再現すべきかどうかについては、もうちょっと皆さんの意見を聞いた上で決めるのがいいんじゃないかというふうに私は思っています。そういうものが、もしできるとなれば、それが一つの目玉になると思うんですが、ただ、今そういう再現したお城みたいなものというのは結構あちこちにありますよね。だから、それをつくることによって川越の観光にどの程度プラスになるのか、その辺のところもよく考えた上でないと、つくってはみたけれども、余りぱっとしないねという、そういう結果になっても困るなというふうに考えております。

《川越市の目指すまちの活性化》

意見 ちょっと聞きたいんですけども、「若者の力を生かした、まちの活性化」ということなんですが、そもそも川越市の考えるまちの活性化というものが、余りよく見えないというか、理解していないと言っていいと思うんですけども、例えば経済が発展すれば、この少子・高齢化の中で、お年寄りの方はまちが活性してよかったと思うのか、それとも川越で生まれてとか川越に住んで、最後は川越で亡くなるのかど

うかはわからないですけれども、川越が好きで、川越にいてよかったなと思う人がふえることが活性化なのか、今の話だとハードの話が多かったように思うんですけれども、そもそもまちの活性化とは、川越市がもう理想のまちはこういうものであって、若者はこういうことをやってほしいとか、若者はこういうことをやるべきだというお話なのかなとは思っていますけれども、できれば、川越市が向かう少子・高齢化も含めて、お年寄りから若者、子どもまで含めて、どういう市が理想なのかなというのをもしあればお聞かせいただきたいですし、そのために若者と呼ばれる我々が何をすべきなのか、それは我々が考えることかもしれないんですけれども、そういうことも含めて教えていただければなと思うんですが。

市長 その点については、一応、私の施策として、住んでみたいまち、住んでよかったと思えるまちをつくっていくという、そういうようなことは申し上げています。それと今年度からは「子育てが楽しいまち」という、そういうスローガンを掲げまして、待機児童解消であるとか、そういうのに力を入れていこうということ言っているんですが、活性化ということは、やはり1つは比較的若い人が多い、それから経済的にもいろんな活発であるという、そういうイメージのまちというところが、私自身あるいは行政が考えている活性化であるというふうに考えていただいていると思うんですけれども。

《鶴川座・織物市場の今後、小江戸川越マラソン》

意見 今おっしゃっていた若者の力云々ということで、場の提供みたいな形で、例えば先日の5月18日に、青年会議所なんですけど、鶴川座を使って写真展みたいなのをやったりですとか、いろいろ動いているところもあるんですが、現状として鶴川座さんと織物市場さんというのは、どういったような形で今後使われていくんでしょうか。例えばあれがミニシアターみたいになってくると、またそういう若い人たちの発表の場になったりですとかするのではないかなというふうに思っていますので、鶴川座さんと織物市場の今後はどうかということ。

あとは私、昨年までマラソンの広報部会長をさせていただきましたので、マラソンの今後として、北環状があと数年後にできると思うんですけれども、その場合、多分、コースが大幅に変わってくると思うので、その際、例えば陸上競技場を使ってバイパスを止めたりですとか、またちょっと別の方法を考えて、そういうことをすることができないものだろうかというふうに、ちょっとそういう話があったんですが、市としては、もしそういうふうになった場合には、ご協力がいただけるのかなということでございます。

市長 鶴川座と織物市場については、まず織物市場のほうは、実は市のものというふうに言われているんですが、厳密に言うと、あれは市の土地開発公社というところが買った土地なんですよ。土地開発公社というのは、川越市の土地取得のためにつくった公社であって、市が直接買うとなると、まず予算措置をしなきゃならないですよ。そういう時間のかかることを省いて、省いてと言うのはいけないかもしれないけれども、臨機応変に必要なに応じて土地を取得することができるような、そういう仕組みとして土地開発公社というのがあるんですけれども、その土地開発公社が取得した土地なんですよ。土地開発公社は、あくまでも市のために土地を取得するための公社だから活用ができない、要するに買ったものを市の目的に従って活用するとかできない、そういう団体というか組織なんですよ。

土地開発公社の持ち物だったために、今まで何も手がつけられなかったんだけど、こここのところで市が買い戻しとって、土地開発公社から今年度中市が取得するというので、お金の算段もつきましたので、市が取得して、その上で実際に動かしていく。動かし方としては、昔のとおり修復して、歴史的な文化財的なものとして使っていくというのが1つ。それから、やや形を変えて、少し今風に修復、手を加えて、そこに例えばいろんな繊維関係のブティックであるとか、そういうような新しいお店なんかを入れていくそういう使い方をするか、あるいはそれ以外の使い方があるのか、今まで何とおりの使い方というのを考えてきたんですが、市が取得したら、それをどういうふうにやるんだということを早急に決めて動かしていかざるを得ない、そういうことになりますので、これは間もなく具体的に形が見えてきます。

鶴川座のほうは、あれは蓮馨寺さんの持ち物なんです、土地も建物も。ただ、昔のああいう劇場としての文化的価値があるということで、簡単に言えば、蓮馨寺さんに、ちょっとこのままにしておいてくださいねという願いをしたままになっているんですよ。あれについても民間の力で何らかの活用方法がないだろうかということ今年度検討するということになっていますので、これについてもちょっと時間はかかるかもしれませんが、何らかの動きは出てくるはずですよ。ただ、鶴川座のほうはかなり傷んでいますよ。だから余り時間をかけると全部崩れちゃうんじゃないかという、そういう心配もありますので、なるべく急ぎたいと思っています。

市民部長 マラソンについては、私、今、担当じゃないんですけれども、前の担当なので、ちょっと答えさせていただきますけれども、前もフルマラソン、当初からやっ
ていこうということで検討させていただきましたけれども、まず警察の許可がおりないんです。国道を横断するというのは、警察がどうしてもだめだということで、やむ

を得ず陸上競技場を使わないで、水上公園側で16号の手前でハーフという形でやっていますので、北環状線ができたとしても、本来であれば陸上競技場からスタートして、ずっと蔵のまちを走っていただいて、フルマラソンで最後に陸上競技場に入っていたかというのが理想かもしれないんですけども、なかなか警察の許可がおりないということで、非常にそれは難しいと思います。

今、来年ハーフで公認をとるということで、動いているみたいですので、できれば北環ができたときには、またコースは変えながら、距離的なものを計算して、今のままでやっていく以外にないのかなと思います。ただ、何回か、10年たった10回なりが終わったら、ある程度、そのときの時点でまたフルマラソンというのも、話によって警察を納得させるような形にしてもいいかなと思うんですけども、今のところは、一応ハーフで、国道を横断しないでという形で考えていました。

《ツール・ド・フランス・イン・ジャパン、自転車競技場》

意見 実は10月26日に、さいたま市のほうでツール・ド・フランス・イン・ジャパンという、さいたま市で行う自転車のレースがあるんですけども、こういったレース、世界各国から興味を持たれている方が日本に来て、また、さいたまに来て宿泊して、そのレースを見るという、1日だけのレースなんですけれども、このレースに際しまして、川越市としては、その大会自体に対してご協力というか、何かお手伝いするようなことがあるのかどうか。また、あるのであれば、そこで川越市に競技者を呼ぶこともできるのではないかなということ、ちょっと思ったのでお聞きしたいんですけども。

あとそれに絡めてなんですけど、ちょっとせがれが自転車をやっているものですかから、ちょっとこの場をおかりしてお聞きしたいことなんですけれども、埼玉県、ご承知のとおり自転車保有率が全国でナンバーワンということで、自転車に乗られている方が非常に多いというふうに言われています。そんな中なんですけれども、じゃ、競技をするところがどこにあるかという、埼玉県内ですと大宮しかないんですね。あとは熊谷にもあるんですけども、大きなところでいうと大宮しかない、しかもかなり古いものなんですけれども、この川越においてスポーツを盛んにさせるために、競技場としてトラックをつくるような計画とか、お考えがあるのかどうかを、ちょっとお伺いしたいんですけども、よろしく願いいたします。

副市長 さいたま市で主催されるツール・ド・フランスの関係は、もちろん県が協力しているものはあるにはあるんですけども、川越市がどうかという部分では、特段何かをするということは予定がありません。

それで、埼玉県は、1つは化石燃料を使わない移動手段として非常に結構だということと、あと健康づくりのために自転車を活用することはいいのではないかという趣旨もありまして、できるだけ自転車の活用というのは、県としても推進しているところでもあります。

確かに競技コースが限られているということをご指摘のとおりでありまして、公道を使って競技ができないかどうか、昨年度は、ちょっと具体名は挙げられませんが、大手の広告会社が提案しまして検討いたしました。ただ、やっぱり公道を使うと警備の関係ですとか諸々がありまして、実は高速道路を使えないかという検討もしたんですけども、警察の協議などが極めて難しそうだということもありまして、引き続き検討していくというようなことで、具体的な実現策ということにはなっておりませんが、そんな動きを県としてもとりつつありますので、近い将来とは言えないんですが、何らかの形で競技というスタイルで自転車を活用することがあり得るだろうと。

あと一部、秩父のほうでは競技をやっているものですから、それを拡大してできないかという検討もしているところでございます。川越市として単独でどうこうというのは、市の内で競技コースを設定してとなりますと、もう少し研究をしてみないと、できるかどうかについては言える状況にはないと個人的には思っております。

《危険な建物》

意見 街なかに、廃墟みたいなうちがありますね。ああいうものがずっとあるんですけども、あれは市のほうで何とかならないものではないでしょうか。ちょっとお伺いしたいんですけども。

市民部長 私、1回、買いに行ったことがあるんですよ。もう4、5年前ですね。そしたら、住んでいるんですよ。前にも同じような意見があって、市に売ってくれと、当時の部長と行ったことがあるんですよ。でも、全然話に乗ってくれないような状況です。

《初雁球場》

意見 先ほど自転車の競技の関係で、競技場の話が出ましたので、今、ちょうど夏のシーズンで高校野球の予選が行われております。私が高校生だったころには、別に野球部ではなかったんですけども、川越の初雁球場というのも、かなり予選の会場として、メインの会場として使われていた記憶があります。しかしながら、このところ老朽化の問題もあるんでしょうけれども、最初の開幕と同時に何回か、2日間ぐらい、3日ですか、初雁球場が使われるだけで、あとはほかの会場に行っちゃって

るところで、ちょっと寂しい思いもあります。球場の老朽化もあるかと思えますけれども、改修があるのか、あるいは新たな野球場をつくるような計画があるのかということと、あと、それこそっと前になると、初雁球場でプロ野球の2軍の試合が行われていたような記憶が若干なんですけれども、そういったプロ野球のイースタンリーグ、2軍の試合とかを誘致できるようであれば、そういったことによって観光客というわけではないですけれども、観客の動員とか、そういったものにつながるんじゃないかなと思っていますが、いかがでしょうか。

市長 初雁球場については、ちょっと規格よりも狭い関係で、高校野球も2回戦ぐらいまでしか使ってくれないという状況になっているんですね。方向性としては、あそこから違うところに移して、新しい球場をつくりたいというふうに思っています。ただ、先立つものがなかなか大変で、今、新しい球場をつくるとなると、やっぱり40億とかかかってしまうという見通しで、これはまだ市の内部でオーソライズされた考えではないんですが、市制100周年に向けて初雁公園を少し充実させようという、そういう予定はあるんですよ。その充実させる一環として、初雁球場をあその場所から違うところに移して、今、球場があるところは公園として生かしていくという、そういう方向性で考えていますので、100周年までにはどこに新しい球場をつくるかを決めて、少なくとも出来上がらないまでも、手をつけ始めているぐらいのところまでは進めたいなというふうに思っています。まだ、具体的にどこの場所に移すとか、そういうことを決めただけでもありませんし、方向性としては、場所は変わるだろうという、そういう考えですね。

《市立川越高校》

意見 今日、テーマが若者の力を生かしたということで、観光の話なんかたくさん今まで出ていますけれども、我々のこの40代とか30代の年代の、ここにいるような人たちがまちづくりに関わっていくのはとても大切だと思うんですけれども、これからまちづくりとかを担っていく子どもたちを育てていかなくはいけないんだろうなというふうに感じるんですが、この6、7年ですか、小江戸サミットのほうにかかわらせていただいて、昨年、川越の担当で、子ども観光ガイドというのをやらせていただいて、その中で受け売りなんですけれども、川越は観光に力を入れているんだから、観光を担う人材育成の場として、市立の川越高校を生かすべきではないかという話が出まして、それがきっかけで、去年のあのような子ども観光ガイドをやらせていただいたんですけれども、設立当初というのは、商売の担い手を育てる場としての川越商業高校だったのが、これから観光の人材を育成する場としての一つの役割として

の川越高校として、例えば観光学科というのか、観光科を設置して、そういう人材育成を市としても担っていくような、そういう考え方にとっても共感したんですね。なので、先ほど出たスポーツのまちとして川越をPRしていくには、野球部とかバレー部とかありますけれども、いろいろ私立高校がありますので、いろんな面で生かせると思うんですけれども、これから市立川越高校をまちづくりという面からも生かしていくような考え方というのが、今あるのかどうかということを伺いたいですけれども、なければないで、ぜひ、そういうことも考えていただければなというふうに思います。

市長 正直なところ、今のところ市立高校をまちづくりのための人材育成に生かすという具体的なプランは持っていません。ただ、去年そういうお話もございましたし、市立高校をただ単に、今はどちらかというに進学校になっていて、進学校として育てていくだけでいいのかと、もともとは地元の商売を担う人たちをつくるための商業高校だったわけですから、何らかの地元役に立つ人材を育てるような、そういうコースなりなんなりを考えるべきじゃないかという、そういう考えもありますので、それはこれから検討させてもらいたいと思います。

《市としての農業への取り組み》

意見 川越は魅力というところで、地方から来た方と話をしたときに、何がいいかという話で、ほどよい都会、ほどよい田舎、これがいいというふうに言ったんですよ。確かに自分も何かそういうところに共感するところがあって、そのほどよい田舎という部分で、田園風景とか、やっぱり農業なんですけれども、TPPとかでいろんな農業に対しての政策をどうしていくかという問題があると思うんですけれども、川越には芋もあって、農業を川越から復活させるような何か勢いでやってもいいのかなというふうに、ちょっと個人的には思うところなんですけれども、そういう部分で、市として農業に対しての育成というか、その辺のところの取り組みとか、やっているのであればその部分と、また何か方針みたいなものがもしあれば教えていただきたいなというところなんですけれども。

市長 正直言って、農業政策が一番難しいところなんですよね。市がやっていることとしても、いろんな形での補助金を出す、例えば農機具を買うときの補助金であるとか、あるいは災害に遭ったときに災害を補填するような、そういうような補助金を出す、簡単に言えばその程度の施策しか持っていませんよね。今、国は人・農地プランというのかな、農地を集積して、要するに一人一人が耕す面積を大きくすることによって農業を維持しようという、そういうような考えでやっています、それは川

越のほうにも、国の施策として、こういうのをやるから、やってよねという、そういう協力要請と言ったらいいのかわからないけれども、そういうものが国の施策に従って、人・農地プランという、そういう農地を集積して継続していくような、それを今度、芳野地区でやろうという、そういう計画は持っています。そのくらいなんですよ。

実際問題として、商業もそうかもしれませんが、川越あたりだと、米をつくっても全くペイしないというような、もうどこでもそうなんだけれども、働き場所が結構ありますよね。これが例えば地方に行くと、その地域での働き場所というのは極めて少ないから、今やっていることを続けるよりしようがないという、そういう人もいるんだけれども、川越近辺だと、別に農業をやらなくたって、あるいは商売をやらなくたって、サラリーマンになる方法は幾らでもある、そういうこともあるから、やっぱり後継者が全然出てこないという面があって、今、本当に農業を担ってくれているのは、ごく一部の若手のやる気のある農家を除けば、それこそ60代、70代、80代の方が農業をやっているというのが実情なんです。だから、このままいけば、あと10年もたたないうちに後継者がいなくなって、農地が全部耕作放棄地になっちゃうだろうと、そういう心配があるから、国が人・農地プランといって、やる気のある人のところに農地を集める、そういう事業を始めたところです。その程度の施策しか残念ながら農業に関しては持っていないというのが現状ですね。

T P Pがどういうふうに影響してくるのかわからないけれども、お米にしても、ほかの農産物にしても、輸入したほうがずっと安いということになっちゃうと、人・農地プランで集積して、例えば20町歩ぐらいの農地を耕すような、そういう水田耕作を始めたとしてもペイしないかもしれませんよね。そういう先行きが全く見えないという面もあるんですよね、正直言って。

意見 結構若い人で熱心な方もいらっしゃるんで、そういう方々が一生懸命やっている姿を見ると、何かうまい仕組みというか、実際、地産地消で一生懸命やっている方もいらっしゃいますし、あと、地元のレストランのほうでも、そういうのを仕入れたりと、そういう食と生産というか、大量にはつくれないと思うので、少量でのうまい活用と、あと東京農大も近いですし、そういうパイオ関係とかをうまく絡めながらというか、具体的にどうのというのはないんですけども、何か一生懸命やっている人たちの手助けというか、その辺がうまくできて、またまちの活性化につながっていけばいいかなというふうには、仕事柄も含めてなんですけれども、ちょっと思うところがあるんですけども。

市長 今、川越近辺の農家で、元気のあるというか、若い人が担って、それなりに仕事としてやっていけるというのが、野菜をつくったり、あるいは花をつくったりという方面なんですよね。本当に水田地帯でお米をつくっている農家というのは、やっぱり若い人はほとんどもういない。だから、川越の農業を伸ばすとしたら、そういう大都会に即売れるような野菜をつくる、それを中心に広げていかなきゃならないだろうと思うんだけど、それができるのが今福あたりの畑地帯に数十件ぐらいある、そういう状況ですね。

水田地帯は、使い様によって、例えば里芋をつくるとか、そういうことで伸ばしている人もいます、お米ではなくて。里芋をすごく効率よくつくったということで、そういう技術を開発したというので国から表彰を受けた人もいますよ、里芋づくりで。その人は水田を使っているのかどうかわからないけれども、そういうような形で、どちらかという野菜に特化して農業を続けていくというのが、東京の近くの農家としてはいいんじゃないのかと、そんなことを考えています。そういう野菜農家に対して、何が行政としてできるかという、やっぱり基本的には何かの補助金を出すとかであって。大体、元気のある農家はご自身でいろいろ考えて、何をつくったら売れるだろうとか、どういうことをやったら商売というか、しっかり食べていける職業としてやっていけるだろうかというのを、もう行政が余り口出す余地がないというか、そういう人たちが元気であるという現状はあります。

副市長 埼玉県としても、やはり危機感を持ってしまして、ご指摘のとおり農業の担い手は、なかなか今、引き継ぐというのは難しくなっている状況です。したがって、耕作放棄地というのが徐々に増えているという、このままいくと農業生産が立ち行かなくなるのではないかということは、ご指摘のとおりでありまして、県が取り組んでいることは、まず第1に、先ほど市長からもお話がありましたとおり、複数の方々小さい範囲で農産物を生産していてもなかなか効率化という部分でも、付加価値をつけるという部分でも、なかなか競争力がつけられないので、できるだけ農地を集約する。集約するに当たっては、特定の個人の農地、農業従事者になっていただくのはいいんですが、リスクをどうとるかという部分では、やはり個人ではなかなか踏み込みにくい部分があると思うんですよね。一定規模の大規模に農業を担うとなると、一定の農業の機械ですとか設備ですとか、そういったものの相当程度投資が必要になります。したがって、どういうことがいいのかという、今のところあり得るのは、農業生産法人という形態があるんですが、農業生産法人をできるだけ増やして、それでその農業生産法人で集約化された農地を活用しつつ、付加価値の高い農産物をできるだけ

つくっていく。東京都など大消費地が近くにありますが、農業生産法人は、農産物を生産するだけでなく、農業の六次化というんですが、要するに加工品から何か、もう全て一定の場所で生産から加工品の販売までを一貫してできるようにしていけば、かなり付加価値がかけられるだろうということが言われていますので、そういった取り組みもやっています。

農業に対して一生懸命やっていたら、農業従事者の方々に、県は農林振興センターの機関がございまして、そこに農業改良普及員という職員がおります。技術的な指導に関しては、実は一生懸命やっている農業従事者のほうが、技術的には進んでいたりして、逆に農業改良普及員が教わって帰ってくるということも結構あるんですが、それはそれとして、農業改良普及員ができるだけ新しい技術、それから効率的な農産物の管理、そういったものを細かく指導していこうということで引き続き取り組んではいます。加えて、さっき言いました農業生産法人への取り組みを各農家のほうにもご協力いただけないかということの話し合いもさせていただいているというところです。

県の目標としては、28年度ぐらいに、今、農業生産法人というのは420ぐらいしかないんですが、それを倍増して900法人ぐらい県内全体に広げていきたい。そうすることで全部ではないんですけども、今、生じている耕作放棄地をできるだけ生かしていく、そういったことにもつながってまいりますので、そういう形で農業生産を何とか維持していくという取り組みをしているところです。

《若い世代への働きかけ》

意見 私は、川越に生まれ育ってきて、子ども会で地域のつながりというのは、大変濃くあるわけなんですけれども、その後、高校、その上の世代から20代、30代ぐらいにかけて、地域とのつながりがどんどん稀薄になっていくわけなんですよね。川越は若い方もたくさんいらっしゃると思うんですけども、我々青年部は50歳までなんですけれども、自治会の青年部は60歳ぐらいまでになってしまって、非常にワイドレンジな青年部なんですよね。10代、20代の方に、青年部へ入って一緒にやろうよと言っても、なかなか厳しいものがあるのかなと思うんですが、青年部ジュニアとか、青年部ジュニアジュニアみたいな、そういうような組織を各自治会とか地域によって、何か起こしていくようなアクションを市でもお考えいただければなと思います。若い世代というのは、なかなか山車でも出さないと出てきづらいかなというところはあると思うんですよね。そこで、やっぱり今、SNS、フェイスブックとかツイッターとかグーグルプラスとか、そういうのを皆さん、若い人はやっている比率は多

いですので、そういうのを市役所の若い職員さんが主導して、10代、20代、30代ぐらいの地域的なつながりをできないかなという気がするんですけども。横に今、23、4歳の若い2人がいるんですけども、お父さんの後を継いで青年部に入っている方は、いろいろつながりができるんですけども、なかなか東京へ働きに行っちゃったりとか、難しいと思うんですよね。東京に働きに行っても、満員電車の中で、スマホでSNSが見れば、地域の情報も入ってくるしというのがあると思いますので、ぜひ市役所の若い人の先導でもいいですし、コーディネートでもいいですし、発案でもいいので、何かそういうようなアクションが起こせないかなというようなことなんですけど、よろしくお願いします。

市長 なかなか難しい問題があると思うんですけども、例えば自治会ではなくて、消防団とか、ああいうのも今、やっぱり入り手が少なくなっていて困っているという、そういうのもあるんですけども、具体的にどうすればいいのか、何とも持ち合わせてないんですけども、何でそうなのかということを見ると、やっぱりおっしゃったように、みんなサラリーマンなんですよね。自営業ではなくて、圧倒的多数がサラリーマンで、かつ職場が川越市外という人が、やっぱり普段は川越にいられない、関心も川越ではなくて自分の職場のある都内であるとかに向いちゃっていると。それをどうやって川越のほうに関心を引き寄せて、あるいはせめて土日ぐらい、地域の活動に出てきてくれよという、そういうことをやるのかというのは、もう正直言ってなかなか難しいですね。

見ていると、やっぱり60歳で定年になってもう勤めがなくなると、都内まで行かない、昼間家にいられる、定年後の就職をしても、フルタイムではなくて半日ぐらい、あるいは週3日とか4日ぐらい、そういうようなゆとりのある状況になって初めて、自分の地元のことに関心が向いてきて、自治会活動に加わってくれるとか、そういう傾向なんですよね。今の日本の産業構造の話をしてしまうと、変えようがなくなってしまうんだけど、サラリーマンであっても、定時に終わって早目に家に帰ってこれて、家族と一緒に過ごせる、家族、子どもたちの学校のことにも関われる、そういうような働き方が主流になれば、随分変わってくると思うんだけど、今の状況だと、川越に関心を向けてもらって、川越における人のつながりを持ってもらうというのが、行政としても、ある意味ではお手上げ状態です。

意見 重ねて質問なんですけど、市役所でも若い方がたくさんいらっしゃると思うんですけども、若い20代ぐらいの職員さんのほうで、何か発案的な、こういうのをやってみようよというような、投書箱とか目安箱みたいなものというのはあるんでしょ

うか。市役所内ですね、若い方の意見を酌むような。

市長 それはあります、提案制度とかですね。

市の職員には、市民のための仕事をしているんだから、いろんな地域の活動であるとか、そういうのには積極的に出なさいよという指導はしています。それはやっぱり、市民のための仕事をやっているんだから、具体的な場面で市民の皆さんに接することによって、市民の皆さんがどういうふうを考えて、あるいは市役所をどういうふうに見ているのかとか、そういうようなこともぜひ知っておく必要があるということで、そういう話は常々はしていますけれども、それは市の職員が地域に出ていくということであって、それぞれの地域に住んでいらっしゃる若い人たちが、働いている若い人たちの地域間でのつながりを持たせるという、それについてはちょっと極めて難しいですねとしか言いようがなくてですね。

意見 ぜひ、何か 20 代だけでプロジェクトチームを市役所内につくるとか、職員の方が。何か上の偉い人に左右されないで自由にできるような、そういうようなチームがあってもいいのかなと思います。

市長 例えば皆さんのほうからも、こういうことをやったら、地域、若い人が地域のことに関心を持ってくれるんじゃないだろうかとか、そういうご提案があればぼんぼん出してもらえば、採用させてもらいますよ、効果がありそうなものは。もちろん今おっしゃっている職員からも、そういう方策があるかどうか、そういうようなことを提案させるということはしていきたいとは思っています。

《縦割り行政、日本で初めてのこと》

意見 実は私は、出身は所沢市でして、川越に引っ越してきたのは 2 年ほど前なんですけれども、先ほどちょっと出た、田舎の面もあって都会もある。かつ所沢とまず違うのは確固たる歴史が川越市にはあるなと思ひまして、比較して、両方ともに住んでみて、私は今、川越のほうが好きで、これからも川越に住み続けたいなと思っております。

実は私、公認会計士として、市の包括外部監査のほうにも説明をさせていただいております。ちょっとがっかりしたのが、先ほど市の行政の若い方のお話が出たんですけれども、やっぱり市役所の方々が非常に保守的、どこの役所もそうなのかもしれないんですけれども、非常に事なかれ主義の考えを持たれている方が多いなというのが実感でございます。縦割り行政というのは、やはりこの市の中でもあるのかなと思ひまして、市全体としての動きが非常に遅いと感じております。

例えば先日、公共施設のマネジメント白書を出されたと思うんですけれども、市内

の施設を全体として取りまとめて、今後の方向性を示していく部署がどこなんだろうというのが、市民から見てちょっとわからないんですよね。そういうような例えば縦割り行政のところの全てに横串をさせるような部署を、例えばそれを市長さんの直属の部署として設けて、市長はいろんなお考えを持たれていると思うので、それをすぐに実行させていけるような部署を、これはちょっと1市民からの提案なんですけれども、それを実現させていっていただきたいなと思っております。

あとは、川越市は中核都市になりますので、日本で初めてのことを川越市がやれば、必ず全国的なニュースになると思うんですね。会計士としては、例えば市役所の会計面を複式簿記に変える検討を始めるとか、例えば市のシステムのクラウド化の検討を始めるといようなことを、小さい市町村さんがしているところもあるんですけれども、川越市が始めたということも必ず全国的なニュースになると思うんですね。それは川越市の名前を売るということにもなりますし、それに加えて観光スポットもあるよといようなことの宣伝にもなると思うんです。ですので、行政側としても新進気鋭といつか、古い歴史に捉われることなく、前を向いて積極的にやっていっていただきたいなと感じております。

市長 お感じになっていることはごもっともといつか、私もそういうふう感じておるところで、何とかしなくてはという思いはあるんですけれども、なかなか具体的な方針といつか、プランにまだなっていない、なれないというそういう段階です。ご指摘のとおり問題はあるといふふうにすごく感じていますから。

《冬水田んぼへの市の支援》

意見 先ほどの農業政策の件なんですけれども、川越市の市の鳥、皆さん、ご存じだと思わんですけれども、雁ですよね。雁って川越で見たことある人、いますでしょうか。

市の鳥としての雁が飛んできてないですよ。その雁を呼ぶということなんですけれども、それを何で今、言い始めたかといつか、川越商工会議所青年部の企画開発室では、約5年前にビオトープといつかをやってみようといつか企画を立ち上げたんです。これは何を目標としているかといつか、川越市の田んぼに冬の間水を張るんです。そうすると、水を張ることによって微生物が育ちます。そうすると、その微生物を食べに、水を張ることによって、田んぼの土がよみがえってきます。微生物が生息しますと、その微生物を食べにいろんな虫が集まってきます。要するに、そういうふうには土壌を改善していきますと、無農薬に近い米といつかをつくるのが可能になってくるんですよ。

無農薬に近い米がつかれる川越市というのは、環境がいいということにつながって
くと思うんですよ。まずは農家の目で見てみると、いいお米をつくれれば、無農薬に
近いお米をつくれれば、川越の米がブランドになってくるかなと。どこも同じような米
をつくっていて、川越の米を売っていたら、今の農家が続けていくのはすごく難しい
かと思うんですけれども。この水田に雁を呼び戻すことによって、川越の鳥を取り戻
す。そしてこれをいずれはラムサール条約、市内の自然を世界的な基準に達するよう
な川越の田んぼができれば、環境に配慮した川越のまちができていないのではないかと
いうふうに日本中が判断すると思うんですね。

そうすることによって、川越市に環境に配慮した企業が入ってくるかと思うんです
ね。環境に配慮した企業、例えばシャープだとか、ホンダさんもそうですけれども、
いろんな会社があると思うんですが、そんな企業が川越に入ってくれば税収も上がっ
てくと思うんですね。税収が上がることによって、先ほどの球場ですとか、いろん
なものに税金が使えるように、市も潤いますし、市民も増えますし、観光だけではなくて、
こういう環境のほうにも力を入れていくことによって、相乗効果で川越のブラ
ンドがもっと上がっていくのではないかなというふうに考えるんですけれども、いか
がでしょうか。

市長 農業に関しては、私はどちらかといえば食料を自給できないような国はしょう
がないなと思っている口で、できればTPPの問題とか、農業にダメージを与えるよ
うなことをしないで、別の形で農業を保護し、振興していくようなことを本当は国が
やってほしいなと思っているんですよ。今おっしゃったような、そういう無農薬の農
業をやることによって環境にもつなげていく、それはとてもいい考えだと思いますの
で、例えば市の事業でそういうのが取り込めるのかどうか、あるいは取り組めるのか
どうか、今後検討させていただきたいと思います。

意見 田んぼ一反に、冬の間水を張るのに、発電機の燃料使用量がかなりかかる
ということで、その水を張るということはしないということなんですけれども、その水
を張るということだけで、大分環境が変わってくるということが示されているので、
できれば水を上げるためのモーターにかかる燃料代のほうを市のほうで考えていた
だけたら、冬水田んぼというのが実現するのではないかなというふうに思います。

市長 ありがとうございます。

《労働人口を増やすための施策》

意見 提案というかお願いなんです、川越で働く人といいますか、労働人口を増や
すということに市政として何か施策を打ち出してみたらどうかと。さっき市長から

も川越都民みたいな話、川越に住んでいて、仕事は東京でという人が多いという話があったと思うんですが、その昼間人口というか、労働人口、川越で住んで、川越で働く、我々は大体そうだと思うんですが、人が増えることで、当然ですけれども住宅関連の消費とか飲食関連の消費も増えますし、先ほど言ったように、例えば6時、7時まで仕事しても、10分、15分で家に帰れたら、そこから自治会とかに出られるので、1時間とか1時間半で東京に行っている人、どこの地方都市も考えていると思いますが、Uターンですね。川越は逆に近過ぎるので、本当の地方ほどUターン施策みたいなことは全然打ち出していないと思うんです。

市役所のホームページも結構見ているんですが、埼玉県ホームページには、いろいろ雇用関連のことやベンチャー支援のことだとか、いろいろ出てくるんですが、川越市独自の余りないかなというふうに思いまして、その中で、川島みたいに工場とか工業団地を誘致するとか、そういう箱物系ではなくて、もうシンプルに雇用を支援するだとか、雇用創出を支援するとかで、例えばうちも今、3年前からお店を初めて、3年間で30人の雇用創出をしているんですが、正社員が今7人いるのかな、あとはアルバイト、パートなんですが、やっぱりまだまだうちみたいな体力だと、例えばいい人をとろうとすると、その人のギャラとか折り合わなかったりとかして、もっと、もうちょっと給料を出せば、この人をスカウトできるかもしれないけれども、今のうちの実力ではあきらめようみたいな話もあったりとか、やっぱり東京で活躍している人を川越までというふうにするためには、それなりの相当思い切って賭けに出ないと、そういう人材を引っ張ってくることはできなかったり、やっぱり一民間だけの力では難しいというのがちょっと何度かあったんです、そういうケースが。そのときに、市で、例えば補助金でもいいですし税制の優遇、何らかの形でそういうベンチャーとか中小企業が、そういう優秀な人材を川越に引っ張ってこようとか、あと川越の主婦とか学生とか、川越の人に十分な雇用環境を与えようということに対して、市としてもそういうのはやっぱりウエルカムだし、ちゃんと応援しているんだということがあるので、経営者としてはちょっと勇気づけられると思います。

あとは、全部が持ち出しではなくて、ちゃんとトータルで経営の中で考えれば、それは生かされるんだみたいになって、いろんな企業がちょっとずつ正社員とか、またアルバイト、パートでも、こういった人の川越の昼間人口を増やすという取り組みをすることで、それは結局その人たちがみんな川越に住みますし、川越で飲み食いしますし、丸広で買い物するかもしれませんし、ボランティアに入るかもしれませんし。私も4年間、商工会議所へ入れていただいて、伝統的な会社がここを引っ張っている

のはすごいと思うんですが、やっぱりベンチャーというのがほとんどいないというか、少ないので、もっともっと川越にそういう若々しい企業が入ってきたりとか、普通に東京で大学出て、10年とか20年、とことん働いたんだけど、ちょっと体を壊したとか、ちょっと疲れたとかいう中で、どうしようかなと人生を考える中で、川越にもいいところあるというか、東京で自分が頑張ってるやっていたのと、別にそんなに遜色ないような働き場所もあるということになれば、そういう人も家族のこととか考えて、じゃ、転職しようみたいに思うと思うんですけども、何かそういう誘い水みたいなものを、もうちょっと行政が戦略的というか、戦術的にいろいろ仕掛けていってもいいんじゃないかと思います。

今、川越は元気だと思うんです。冒頭に言ったように、すごく活気がありますし、チャンスというか、ここではそういうもっと足腰がしっかりしてきて、労働者とかベンチャー企業とかもどんどん加わってくれば、かなり今後も見通しがあるのではないかと思います。いろいろ言いましたが、結局、一言で言うと雇用創出ということに対して、川越市としてこだわっているというメッセージをすごく強く打ち出したりとか、市役所としても川越独自の小江戸川越、例えばベンチャー中小企業支援プログラムみたいな形で、箱物じゃなくて、とにかく人に対する何かいろんなバックアップ、そっちのほうをやりますといったようなものを、商工会議所を通してですね、我々経営者にどんどんメッセージを出してくれれば、もっといいんじゃないかなと思います。そういう検討とかどうでしょうか。

市長 雇用創出のための施策というのは、極めてオーソドックスなのは工場誘致なんかをするというところで、川越もそれについては、川越に入ってきてくれた事業者さんについては、固定資産税相当分の補助を、最初の年は100%、翌年は50%ぐらい、その次は30%ぐらい、3年ぐらいにわたって出すという、そういう要するに簡単に言えば企業誘致のための、それによって雇用を創出するための方策というか、そういう補助金制度はあります。

それともう一つ、既存の事業者さんが雇った場合に、どういう条件の人を雇った場合なのか、ちょっと今、頭の中には入っていないんだけど、半年ぐらいは給料の補助金みたいなものを出すという制度もあって、それは商工会議所さんと一緒になってやっていると思うんです。雇用創出のための事業というのは、ぱっと頭に浮かんでくるのは、その2つぐらいなんですけれども、ベンチャー企業を川越の中で誕生させる、発展させる、そういうような方面での事業というのは、残念ながら今のところはやっていないです。

それはおっしゃるように、非常に地域の経済にとってプラスになることだから、それは検討させてもらいたいと思うんですが、多分、今までもいろいろ検討してきたけれども、なかなか難しい問題があるということでやらないままになっているのではないだろうかという、そういう推測はできると思うんですけれども、何か県の立場からありますか。

副市長 なかなか耳の痛いご指摘かなと思いますが、そもそも雇用の創出を含めた労働行政は、行政の仕事の範囲でいいますと、どちらかという国の仕事ではないかということで、国のほうの労働政策をできるだけ推し進めていただきたいという趣旨で、都道府県ですとか市町村の立場が1つあります。ただ、そんなことを言っていると、どんどん若い人たちが流出しちゃったりして、産業も育たなくて人口は減るばかりという、労働人口もどんどん減る一方で地方は廃れてしまうというそういう危機感がありまして、特定の地方ですとか、あるいは都道府県が指導していることが多いんですけれども、埼玉県の場合でいうと商業支援ということでベンチャー支援センターというものを立ち上げて、女性の起業なども含めているような支援はしているところです。ただ、そういう相談窓口は、さいたま新都心にしかないのも、一定程度地域地域にそういう相談窓口などが機能としてあったほうがいいのではないかとご意見はいただいています。したがって、そういう部分を市町村が一定部分を担うことができれば、よりベンチャーの起業を後押しするという意味では、役割が果たせるのかなと思うところであります。

具体化については、今のところありませんけれども、課題のうちの1つとして捉えていく必要があると思います。

意見 ちょうど今度、ふれあい拠点センターができるので、県ともより密接になっていく施策も生まれるかもしれないので、その中でやっぱり、インキュベーションセンターも備えますし、あと、でもそんなに大がかりに、ハードだとどうしても投資が必要になるので、予算がとれないという話になると思うんですが、ある程度決定すれば、議会が承認すればできるような施策で、ソフトでも、ベンチャー支援とか、起業だけじゃなくて、もう既にやっている我々ベンチャーとか中小企業をもっと後押しするような、ドライブをかけるようなことは、やっぱり市が、特に小江戸川越はやっているよというふうになると、ますます観光だけじゃなくて、もっとそういう産業も集まってくるような気がするんですけれども。

副市長 今、建設を始めていますが、西口に西部ふれあい拠点施設を県と共同事業で行っておりますので、県も産業振興施策として、あそこの中にインキュベーション機

能、創業者を目指している方々のためのインキュベーション施設を 24 時間利用できるように確保する予定がありますので、そういったものがこの川越に関して言うと、一定程度の役割が果たせるのかなと考えているところですが、とは言いながら、市は市としても県と連携を図りながら、ご指摘の部分についてはちょっと検討させていただきたいと思います。

《工場等の誘致と水道・下水道料金》

意見 私、20 年間ぐらい水道業をやってきて、工場等の誘致、大規模施設等の誘致で、飯能、日高、川島、あの辺に集中してしまって、川越になかなか来てくれないという理由で、何でかということを見ると、水道利用加入金、あと下水道利用、従量制をとられていると思うんですけども、そこら辺の料金が、他の市または他の都に比べて高過ぎるという意見をよく聞きます。そのおかげで、川越インターもあるのに、なかなか工場が新しく誘致されないのかなと。川島はインターができたなら、すごい勢いで工場とか倉庫とかか建って、あとは日高、飯能のほうに、国によって工場誘致が盛んに行われているところがあります。川越さんには何度か私もお手伝いして、話は来るんですけども、加入金の件でというのが過去に何度かありましたので、それも 20 年、30 年、金額が変わっていないと思うので、そこら辺、何とか検討していただけないかと思います。

市長 水道あるいは下水道料金の件については、ご意見として検討させていただきます。日高とか川島とかに新しい工業団地がどんどんできてきたというのは、1 つはやっぱり圏央道のインターがあるからという、それがかなり大きな要素を占めているところですよ。川島は、県の企業局がつくったものなんですよ。川越も芳野台の第 2 産業団地の部分は、県がやってくれた部分なんだけれども、最近のそういうどんどん新しい工業団地ができているところは、やっぱり圏央道がだんだんと伸びている、その効果という面がかなりあるのではないだろうかというふうに私は見ているんですが、水道、下水道料金については、よく検討させてもらいます。

《太陽光発電施設への補助制度、エコタウンプロジェクト》

意見 川越市は、もともと随分前から太陽光発電に関しましては非常に手厚い補助金を出していただきまして、毎年毎年補正予算も組んでいただいているということで非常に感謝しています。また、川越市役所の環境政策課の対応が非常によろしくて、先ほどの人もおっしゃられたように、市長のご指導が非常に行き渡っているのではないかなと私は思います。その市の補助金の窓口には比べまして、恐らく埼玉県内では川越市の窓口の対応がいいんじゃないかと思います。

欲を言っではなんですけれども、今年度、埼玉県でエコタウンプロジェクトというものがございます。今、東松山と本庄市で、ちょっと手厚い補助金が出ていますね、試験的にエコタウンプロジェクトを行っておりますが、試験的に太陽光発電を応援しようかという試みをしています。来年度に当たって、川越市で、そういったものを利用するようなご予定はありませんでしょうか。

市長 エコタウンプロジェクトは県のプロジェクトですよ。あれは手を挙げれば必ずしも採用されるというわけではないんですよ。

副市長 提案すれば採用されるというわけではないです。

意見 何か条件があるんですか。

副市長 県の進めているエコタウンプロジェクトには、やっぱり一定程度の枠組みといいですか、県が目指している位置づけがありまして、基本的には、そのまちにおけるエネルギーの地産地消といいですか、エネルギーが自給できると、最終的にはそこが目的という前提です。したがって、住んでいるところの住居地域、あるいは東松山で展開しているのは駅前の商店街の近隣に、たまたま相当程度の空き地があったものですから、そこにメガソーラー、太陽光パネルを置いて、そこから電気を供給するという枠組みができています。これは民間企業にも参入していただいて推し進めているんですが、最終的にエネルギーの地産地消をするためには夜間の電力をどうするかと。今できることは、どうしても蓄電池を確保せざるを得なくて、蓄電池をどれだけ置いてもらえるか、設定できるかというところが最終的にはプロジェクトの成否にかかっているところでもあります。今のところは非常に高いので、高価なものをどういうふう負担して設定していただけるのかというところが大きな課題になっていまして、県と民間と、それから地元の東松山市のほうで、皆さん、知恵を出し合いながらということを取り組んでいるんですけれども、そこがなかなか難しい面があると思います。

本庄のほうは、新幹線の新駅ができましたので、あそこの周辺が土地区画整理事業で新しいニュータウンができていますから、そこに地産地消のプロジェクトを浸透させようということで、まずは各家庭において太陽光パネルを何とか置いてもらえればということで進めていると聞いています。

そういったことが一定の条件になりますので、川越市のほうでできるかといったところでは、今のところ即断はできないですけれども、一つのモデルとして二つの地域で始めていますので、そういったものが参考に取り入れられるのであれば、市もやることがあるかもしれません。今、ちょっと一定の空き地があるので、そこを民間の方

にお貸しして、そこで太陽光パネルを置いて、発電がもしできるのであればということ、ちょっと検討させていただきたいと思います。

市長 本日は、皆様方からいろいろご意見をいただきまして、本当にありがとうございます。

冒頭に申し上げましたように、私の問題意識としては、今のこの川越のにぎわいがいつまでも続くものだろうかという、そういう不安を抱いておりまして、これを続けるため、さらに、あるいはにぎわいを大きくしていくためには、やっぱり常にいるんな工夫が必要なんだろうなと。じゃ、どういう工夫をしたらいいのか、そういうようなことを常々考えております。

観光面に特化して言えば、3年ぐらい前は、私は川越に芸者さんを復活させたらどうかという話をあちこちで言って回ったんですけども、なかなか市民の皆さんの中で具体的な動きになってこない。いろいろ問題があるんだったら、じゃ、今度は素人さんに飲食店で芸を披露してもらうようなことを、伝統芸能を披露してもらうようなことをやってみたらどうだろうかということ、最近言っています。素人さんは、結構いろんなところで演芸大会をやっていて、技術の高い人が結構います。三味線がうまいとか、日本舞踊がうまいとか、謡ができるとか、そういう人たちの発表の場が欲しい、要するに人に見せたいわけですよ。だから、そういう人たちに例えば料亭なんかで出てもらって、観光客の人に見てもらえば、比較的安い料金で楽しんでもらえるということもあるんじゃないだろうかということで、今そんなことを言ったりしているんですが。

皆さん方、ぜひ川越に元気をさらに出していくためには、やっぱり皆さん方の事業、企業がどんどん伸びていく、発展していく、それが川越の活性化にもなりますし、川越にさらに元気をつけていくということにもなる、もちろん雇用の創出にもなるわけですので、ぜひ皆さん方、川越でいろんな事業をやっていらっしゃる方で、しかもまだ若くてエネルギーがあって、これから将来もいっぱいある方ですので、ぜひ、そういう点をいろいろ考えながら、ご自分の商売をどうやったら伸ばしたらいいんだろうということを一生懸命考えていってもらいたいなというふうに思っています。

今日、蓮馨寺の近くを通ったときに、蓮馨寺のちょっと手前、北側のところにシャッターが閉まったままになっているところが2カ所ほどあるんですよ。ああいうところも、例えば食べ物屋をやれば、そこそこ人は通っているんだから商売になるんじ

ゃないかなというようなことを私は思ったんですが、例えば一番街で焼きおにぎりを売っているところがありますよね、結構行列ができていますよね。ああいうふうなのを見て、ぜひ今やっている仕事を伸ばしていくのも必要ですし、あるいはほかの業種にちょっと手を出していただいて、せっかくこれだけ人が来ているんだから、これを儲けの種にしてほしいなというようなことを常々考えておりますので、その面はぜひ、皆様方にしかできないことですので、よろしくをお願いします。

それとはまた別に、行政に対して、あるいは他の地域の問題なんかでご意見があれば、遠慮なくいろんな形で行政のほうに寄せていただけたらというふうに思います。いずれにしても、やはり商売もそうですけれども、行政も常に先を考えて、いろんな工夫を常に考えていかなきゃならないというふうに思っていますので、今後とも皆様方のご協力をどうぞよろしくお願いします。

本日はありがとうございました。